

「忘れられてラッキー」 創世記41：1～16

I 導入部

おはようございます。7月第一日曜日を迎えました。今日も愛する皆さんと共に礼拝をささげることのできる恵みを感謝致します。6月29日の金曜日に梅雨が明けました。29日の朝に、空を見ると青々としていて、「もう夏だなあ」と思いましたら、梅雨が明けたとニュースで言うておりました。6月の関東地区の梅雨明けは、初めてのようです。これから、本格的な夏を迎えます。健康に注意して、神様を疑うことに注意して、神様を信頼して、この月も歩んでまいりましょう。

今日から早朝礼拝が始まりました。暑い夏の朝早く、さわやかな環境で礼拝をささげてみてはいかがでしょうか。今日の早朝礼拝もさわやかでした。

今日は、創世記41章1節から16節を通して、「忘れられてラッキー」という題でお話しします。

II 本論部

一、主は確かに共におられる

ヤコブには子どもは、12人おりますが、その中でも特にヨセフをかわいがりました。それは、4人の妻のうち、一番愛した妻の子どもであり、年老いて生まれた子どもだったからです。ヨセフは小さい頃、お兄さんたちの事を父に告げ口したり、父や兄が自分の前にひれ伏すというような夢を見て、その内容を語ったりしました。また、父は他のどの兄弟よりもヨセフをかわいがり、大切に育て、特別な服を着せたりしたので、兄たちはヨセフを憎み、ヨセフに対して穏やかに話すことができませんでした。

現在、他の小さな子どもは、かわいがり、一人だけ虐待するというような事件があります。ヨセフとは、まったく逆の事柄ですが、親としていかなるものかと問われるのですが、親も人間であり、弱い存在であることがわかります。子どもを育てるのにも、神様の助けが必要なのだと思うのです。

ヨセフと兄たちの関係は、そのようにあまり良い関係ではありませんでしたので、兄たちは、ヨセフをエジプトに売り飛ばしてしまいました。ヨセフは奴隷としてエジプトに連れて行かれ、エジプト王ファラオの宮廷の役人、侍従長のポティファルという人に買い取られました。自分の国から遠いエジプトに奴隷として売られたヨセフでしたが、聖書は、「主がヨセフと共におられた」(39:2)と記しています。だから、主が共におられたので、彼のすることは主人に認められ、主人は、家の管理、財産の全ての管理をヨセフに明かせるほどになったのです。

しかし、主人の妻からいいよられ、それを避けていたのですが、主人の妻の嘘によって、ヨセフは監獄に入れられたのです。けれども、聖書は、「しかし、主がヨセフと共におられ、恵みを施し」(39:21)とあります。主が共におられたのですが、主人の妻の罠や嘘からは守られませんでした。けれども、その困難と苦しみの中に、主は共におられ、痛みを経験するのですが、神様のヨセフに対する計画は着々と進むのです。私たちの信仰生活においても、主は共におられます。しかし、苦しい事や悲しい事を経験します。それは、神様が共にいて下さらないのではなく、私たちにはわからなくても、神様の私たちの対する計画、祝福の、恵みの計画が進められているのです。そのことを信じたいと思うのです。

二、全てが整ってなくてもいいのです

ヨセフの入れられた監獄は、王の囚人をつなぐ監獄でした。それは、ヨセフが王の役人、侍従長のポティファルの家で仕えていたからでしょう。王の囚人をつなぐ監獄に入れられたからこそ、神様の次の計画が生きるのです。神様はヨセフと共におられたので、この監獄の中でも、看守長の目にかなうように導かれました。看守長は、囚人を皆、ヨセフに委ねたので、監獄の中ではすべてヨセフが取り仕切るようになったのです。監獄の中にも、神様が共におられ、全てを最善に導かれたのです。

神様が共におられるとは、環境が全て整っているということもありますが、環境がまったく整っていない場所でも、神様は共におられ、神様のみ業を行われるということです。私たちは、環境が整ったら、良い状態なら、条件が良ければ、うまくいくと思います。しかし、神様には、条件も、環境も、場所も、状況も関係ありません。どんなに悲惨な場所でも、落ちる所まで落ちたとしても、そこを恵みの場所として下さるのです。神様が共におられるということ信じられない場所にも、必ず共にいて下さるのです。状況は良くならなくても、神様は共におられ、あなたを支え、あなたを守り、あなたを導いて下さるのです。

ヨセフのいた監獄に、エジプト王の給仕役の長と料理役の長が過ちを犯して、入れられました。そして、二人ともに夢を見ました。しかし、その夢の意味がわからないので、落ち込んでいたのです。ヨセフは二人に落ち込んでいる理由を聞き、夢を解き明かしてくれる人がいないことを知ります。その時、ヨセフは「解き明かしは神がなさることではありませんか。どうかわたしに話してみてください。」(40:8)と言ったのです。給仕役の長が夢を話すとヨセフは、三日目に王は給仕役の長をもとの職に戻すことを解き明かし、給仕役の長が元の職務に戻ったら、ヨセフのことを思い出し、ファラオ王に無実の罪で監獄に入れられたことを告げて下さいと頼んだのです。監獄から出る唯一のチャンスをヨセフはつかもうと考えたのです。給仕役の長に大いに期待したのです。同じように料理役の長も夢を話しましたが、三日目に木にかけられる、死刑にされると解き明かしたのです。そして、ヨセフが解き明かした通りに、給仕役の長は職に復帰し、料理役の長は木にかけられたのです。創世記40章23節には、「ところが、給仕役の長はヨセフのことを思い出さず、忘れてしまった。」とあります。ヨセフはあれだけお願いしたのに、給仕役の長は忘れてしまったのです。ヨセフは、たったひとつの希望も失ってしまいました。しかし、この忘れ

られた、ということが大きな恵みとなるのです。忘れられてラッキーだったのです。

三、神様があなたを忘れることはないのです

創世記4章1節には、「二年の後」とあります。ヨセフが給仕役の長に忘れられたから2年たったのです。エジプト王ファラオが夢を見たのです。不吉な夢です。恐ろしい夢です。恐ろしければ、恐ろしいほど、その夢の意味が気になります。王は、この夢の意味を知りたいと思いました。そして、エジプト中に偉人を呼び集めて、自分の見た夢を話し、その夢の意味を解き明かすようにと命令したのです。王宮は大騒ぎになりました。

9節です。「そのとき、例の給仕役の長がファラオに申し出た。「わたしは、今日になって自分の過ちを思い出しました。」 例の給仕役です。ヨセフに自分の事を取り計らってほしいと頼まれた例の給仕役の長です。思い出したんです。ヨセフのことを。一番大事な時にです。ここぞ、という時にです。2年前に思い出してはいけなかったのです。忘れられてよかったのです。忘れてもらった方がよかったのです。この2年間、ヨセフにとっては、苦しみの、嘆きの、辛い2年間だったでしょう。しかし、この2年間で、ヨセフも神様に取り扱われたのに違いないのです。詩篇105篇19節には、「主の仰せが彼を火で練り清め、御言葉が実現する時まで。」とあります。口語訳聖書には、「彼の言葉の成る時まで、主のみ言葉が彼を試みた。」とあります。リビングバイブルには、「しかしこれこそ、ヨセフの忍耐を試す絶好の機会となりました。」とあります。

この2年間は、ヨセフをさらに整え、人間的にも整えたのでした。ヨセフは早速、王の前に呼び出され、ヨセフは王に答えました。16節です。「わたしではありません。神がファラオの幸いについて告げられるのです。」 かつて、給仕役の長はヨセフの解き明かした通りになりました。自分の力に頼ってもおかしくはありません。神様は、このように特別な賜物を与えられたヨセフを2年間、さらに整えたのです。王の前に引き出される前にです。

かつて、給仕役の長、人に頼って絶望しました。人に頼ることのはかなさを知りました。いつでも、どんな時も、神様だけに信頼することを覚えたのです。彼は王の夢を解き、7年の豊作と7年の大飢饉に備えて準備することを提案し、ヨセフこそが、この件を解決できる人物として、全国のつかさ、王に次ぐ人物となったのです。2年前に、忘れられたからこそ、今があるのです。忘れられた方がよかったのです。それも神様の導きでした。

私たちの信仰生活において、忘れられたり、落ちこぼれたり、リタイヤしたり、マイナスに見えることを経験します。しかし、それはマイナスなのではなく、神様のみ業なのです。そして、私たちを謙遜にし、整え、神様のみを信頼することを学ぶ時なのです。ですから、目に見える所が、どんなに悲惨でも、そのことを益に変え、恵みとして下さる神様を信じて、神様に信頼して歩もうではありませんか。

III 結論部

神様はヨセフの人生を最善に導かれました。いつも共におられました。しかし、苦しみや悲しみを、絶望を経験しました。しかし、全ての事柄の中に神様の導きを見ることがで

きるのです。私たちの信仰生活においても、イエス様が共におられます。しかし、苦しみや悲しみ、痛みを経験します。その悲しみや苦しみは喜びに変えられるのです。私たちを救うために、私たちの罪を赦すために、イエス様は十字架にかかり、尊い血を流し、命をささげて下さったのです。私たちをここまで愛されたイエス様が共におられます。そして、最善に導いて下さるのです。このお方は、あなたを忘れることなど決してないのです。大丈夫、私が共にいる、と言われるイエス様のことばを信じて、イエス様を信頼して、この暑い週もイエス様と共に歩んでまいりましょう。